

エレミヤの哀歌

第一章

一 あゝ哀しいかな古昔は人のみちみちたりし此都邑 いまは凄しき様にて坐し寡婦のごとくになれり 嗟もろもろの民の中にて大いなりし者もろもろの州の中に女王たりし者 いまはかへつて貢を

二 いるゝ者となりぬ 彼よもすがら痛く泣きかなしみて 涙面にながる その戀人の中にはこれを慰むる者ひとり

三 だに無くその朋はこれに背きてその仇となれり ユダは艱難の故によりまた大いなる苦役のゆゑによりて擄

四 はれゆきもろもろの國に住ひて安息を得ずこれを追ふものみな狹隘にてこれに追しきぬ シオンの道路は節

會に上り來る者なきがために哀しみその門はことごとく荒れその祭司は歎きその處女は憂へシオンもまた自

五 から苦しむ その仇は首となりその敵は亨ゆその愆の多きによりてエホバこれをなやませたまへるなりその

六 わかき子等は擄はれて仇の前にゆけり シオンの女よりはその榮華ことごとく離れされりまたその牧伯等は草

七 を得ざる鹿のごとくに成りおのれを追ふものの前に力つかれて歩みゆけり エルサレムはその艱難と窘迫の時

八 これを見てその荒はてたるを笑ふ エルサレムははなはだしく罪ををかしたれば汚穢たる者のごとくなれり

九 前にこれを尊とびたる者もその裸體を見しによりて皆これをいやしむ是もまたみづから嗟き身をそむけて退ぞ

けり その汚穢これが裾にあり彼その終局をおもはざりき 此故に驚ろくまでに零落たり 一人の慰さむる者だ

一〇 に無しエホバよわが艱難をかへりみたまへ 敵は勝ほこれり 敵すでに手を伸てその財寶をことごとく奪ひ

イ 四七・七、八 二 耶一三・一七 へ 哀一・九、一六、一七 申二八・六四、六五 又 耶三〇・一四、一五 王 哀一・一〇 結一六・三七、二三
 口 四二・二〇 ホ 耶四・三〇、三〇・二二 哀二・九 申二八・四三、四四 ル 五二・二八 王 上八・四六 二九 何二・一〇 夕 哀一・二、一七、二二
 ハ 伯七・三 詩六・六 一四 哀一・一九 ト 耶五二・二七 申二八・四三、四四 五二・二八 力 耶一三・二三、二六 申三二・二九 賽 一 哀一・七

ソ申二三・三 尼二三 ナ但九・一二
一五五 一五九・二〇、一九、才耶四・三一
ラ結一二・二三、一七 一五五 一五九・二〇、一九、才耶四・三一
ツ耶五一・五一 二二〇 半耶二三・一七、一四 十尼九・三三 但九・一四
ネ耶三八・九、五二・六 ム申三八・四八 七、一四 才耶二・二一 耶三〇・一六
哀二・二二、四・四 ウ賽六三・三三 獸一四 ノ哀一・二、九 マ導前二・一四、コ伯三〇・二七 賽 八
一六・二一 耶四・一九、四八・三六 哀二・二一 何一・一

たり 汝なんぢさきに異邦人等はなんぢの公會こうかいにいるべからずと命めいじおきたまひしに 彼らかれらが聖所せいじよに侵をかしいるをシオンは
見たり 二 二 その民はみな哀なげきて食物くひものをもとめ その生命いのちを支さへんがために財寶たからを出いして食しにかへたり エホバよ
見みそなはし我われのいやしめらるゝを顧かんりみたまへ 二 三 すべて行路人みちゆくひとよ なんぢら何なにともおもはざるか エホバそ
の烈はげしき震怒いかりの日に我われをなやましてわれに降くだしたまへるこの憂苦うれひにひとしき憂苦うれひまた世よにあるべきや考かんがへ見みよ
三 三 エホバ上うへより火ひをくだしわが骨ほねにいられて之これを克服かちやくせしめ 網あみを張はりわが足あしをとらへて我われを後うしろにむかしめ 我われを
四 四 して終日ひねもすころ心こころさびしくかつ疾やみわづらはしめたまふ 一四 わが愆尤とがの輓くびきは主しゆの御手みでにて結むすばれ諸もろろの愆とがあひ纏まつはりてわが
五 五 項むちにのれり 是これはわが力ちからをしておとろへしむ 主しゆわれを敵あだたりがたき者ものの手てにわたしたたまへり 一五 主しゆわれの中うちなる
勇士まさしををことごとく除のぞき 節會せちまをもよほして我われを攻せめわが少わかき人ひとを打うちほろぼしたまへり 主しゆ酒樽しゆさかをふむがごとくに
六 六 ユダの處女をとめをふみたまへり 一六 これがために我われなげく わが目めやわが目めには水みづながる わがたましひを活いすべき慰なぐさ
七 七 さむるものわれに遠とほければなり わが子等こらは敵てきの勝かてるによりて滅ほろびうせにき 一七 シオンは手てをのぶれども誰たれもこ
れを慰なぐさむる者ものなしヤコブにつきてはエホバ命めいをくだしてその周圍まわりの民たみをこれが敵てきとならしめたまふ エルサレ
八 八 ムは彼らかれの中なかにありて汚けがれたる者もののごとくなりぬ 一八 エホバは正ただし我われその命令おんせにそむきたるなり 一切すべての民たみよ
九 九 われに聽きけ わが憂苦うれひをかへりみよ わが處女をとめもわかき男をとこも俘囚とらはれて往ゆり 一九 われわが戀人こひびとを呼よびたれども彼らかれはわれ
二〇 二〇 を欺あざむけり わが祭司さいしおよびわが長老としよりは生命いのちを繫つながんとて食物くひものを求もとむる間に都邑まちの中うちにて氣息いきたえたり 二〇 エ
ホバよかへりみたまへ 我われはなやみてをり わが腸はらわたわきかへり わが心こころわが衷うちに顛倒てんたうす 我われ甚なほしく悖もとりたればなり

エレミヤ哀歌 一・一一——二〇 一三七九

二 外には劍ありてわが子を殺し 内には死のごとき者あり 一
 だに無し わが敵みなわが艱難をきよおよび 汝のこれを爲たまひしを喜こべり 汝はさきに告しらせしその日を
 三 來らせたまはん 而して彼らもつひに我ごとくに成るべし 一
 二 ねがはくは彼等が與へし艱難をことごとくなんぢ
 の御前にあらはし 前にわがもろもろの罪愆のために我におこなひし如く彼らにも行なひたまへ わが嗟嘆は多く
 わが心はうれひかなしむなり 一

第二章

一 あゝエホバ震怒をおこし 黒雲をもてシオンの女を蔽ひたまひ イスラエルの榮光を天より地にお
 二 としその震怒の日に己の足蹠を心にとめたまはざりき 一
 三 主ヤコブのすべての住居を吞つくして
 四 あはれませず 震怒によりてユダの女の保砦を毀ちこれを地にたふしその國とその牧伯等を辱かしめ 一
 五 震怒をもてイスラエルのすべての角を絶ち 敵の前にて己の右の手をひきちぢめ 四面を焚きつくす燃る火のごと
 六 くヤコブを焚き 敵のごとく弓を張り 仇のごとく右の手を挺て立ち 凡て目に喜ばしきものを滅しシオン
 七 の女の幕屋に火のごとくその怒をそよぎたまへり 一
 八 主敵のごとくに成たまひてイスラエルを吞ほろぼしその
 九 諸の殿を吞ほろぼしそのもろもろの保砦をこぼち ユダの女の上に憂愁と悲哀を増くはへ 一
 十 園のごとく己の
 幕屋を荒しその集會の所をほろぼしたまへり エホバ節會と安息日とをシオンに忘れしめ 一
 十一 烈しき怒によりて王
 十二 と祭司とをいやしめ棄たまへり 一
 十三 主その祭壇を忌棄てその聖所を嫌ひ憎みてその諸の殿の石垣を敵の手に
 十四 わたしたまへり 彼らは節會の日のごとくエホバの室にて聲をたつ 一
 十五 エホバ、シオンの女の石垣を毀たんと思ひ

イ申三二・二五 結七 ホ哀五・一七
 一・二五 一 後後一・一九
 一 後後一・一九
 二 後後一・一九
 三 後後一・一九
 四 後後一・一九
 五 後後一・一九
 六 後後一・一九
 七 後後一・一九
 八 後後一・一九
 九 後後一・一九
 十 後後一・一九
 十一 後後一・一九
 十二 後後一・一九
 十三 後後一・一九
 十四 後後一・一九
 十五 後後一・一九
 十六 後後一・一九
 十七 後後一・一九
 十八 後後一・一九
 十九 後後一・一九
 二十 後後一・一九
 二十一 後後一・一九
 二十二 後後一・一九
 二十三 後後一・一九
 二十四 後後一・一九
 二十五 後後一・一九
 二十六 後後一・一九
 二十七 後後一・一九
 二十八 後後一・一九
 二十九 後後一・一九
 三十 後後一・一九
 三十一 後後一・一九
 三十二 後後一・一九
 三十三 後後一・一九
 三十四 後後一・一九
 三十五 後後一・一九
 三十六 後後一・一九
 三十七 後後一・一九
 三十八 後後一・一九
 三十九 後後一・一九
 四十 後後一・一九
 四十一 後後一・一九
 四十二 後後一・一九
 四十三 後後一・一九
 四十四 後後一・一九
 四十五 後後一・一九
 四十六 後後一・一九
 四十七 後後一・一九
 四十八 後後一・一九
 四十九 後後一・一九
 五十 後後一・一九
 五十一 後後一・一九
 五十二 後後一・一九
 五十三 後後一・一九
 五十四 後後一・一九
 五十五 後後一・一九
 五十六 後後一・一九
 五十七 後後一・一九
 五十八 後後一・一九
 五十九 後後一・一九
 六十 後後一・一九
 六十一 後後一・一九
 六十二 後後一・一九
 六十三 後後一・一九
 六十四 後後一・一九
 六十五 後後一・一九
 六十六 後後一・一九
 六十七 後後一・一九
 六十八 後後一・一九
 六十九 後後一・一九
 七十 後後一・一九
 七十一 後後一・一九
 七十二 後後一・一九
 七十三 後後一・一九
 七十四 後後一・一九
 七十五 後後一・一九
 七十六 後後一・一九
 七十七 後後一・一九
 七十八 後後一・一九
 七十九 後後一・一九
 八十 後後一・一九
 八十一 後後一・一九
 八十二 後後一・一九
 八十三 後後一・一九
 八十四 後後一・一九
 八十五 後後一・一九
 八十六 後後一・一九
 八十七 後後一・一九
 八十八 後後一・一九
 八十九 後後一・一九
 九十 後後一・一九
 九十一 後後一・一九
 九十二 後後一・一九
 九十三 後後一・一九
 九十四 後後一・一九
 九十五 後後一・一九
 九十六 後後一・一九
 九十七 後後一・一九
 九十八 後後一・一九
 九十九 後後一・一九
 一百 後後一・一九

二四・一五、二五・二六
七 哀一・三四・ノ伯二・一三 賽三・一八、二七・三一
二〇 二六 哀三・二八 マ哀一・二〇 一八、二七・三一
ウ代下一五・三 才伯二・一二 詩 六・七 哀三・四八 二九・八、九 結一三
半詩七四・九 結七・ク賽一五・三 結七・二二・一四 詩 耶二・八、五・三一、ラ賽五八・一
一六、二七・一四、一六、二七・一九、四・四 一六、二七・一四、一六、二七・一九、四・四
二九・八、九 結一三 二九・八、九 結一三 二九・八、九 結一三
サ結二五・六 四四・二四 四四・二四 四四・二四
キ王下一九・二一 詩 四六 四六 四六
ミ詩五六・二 詩 三三・八、一六、八九
シ詩三五・二一 詩 三三・八、一六、八九 四二

九 さだめ 繩を張りこぼち進みてその手をひかず 壕と石垣とをして哀しましめたまふ 是らは共に憂ふ その門

一〇 は地に埋もれ エホバその關木をこぼちくだきその王ともろもろの牧伯は律法なき國人の中にあり その預言者

二一 はエホバより異象を蒙らず シオンの女の長老等は地に坐りて黙し首に灰をかむり身に麻をまとふ エルサレ

二二 ムの處女は首を地に低る わが目は涙の爲に潰れんとし わが腸は沸かへり わが肝は地に塗る わが民の

二三 女ほろぼされ 幼少ものや哺乳子は疲れはてゝ邑の街衢に氣息たへなんとすればなり かれらは疵を負る者の

二四 如く邑のちまたにて氣息たえなんとし 母の懷にその靈魂をそゝがんとし 母にむかひて言ふ穀物と酒とはいづく

二五 にあるやと エルサレムの女よ 我なにをもて汝にあかしし 何をもちて汝にならべんや シオンの處女よ われ何

二六 をもちて汝になぞらへて汝をなぐさめんや 汝のやぶれは海のごとく大なり 嗟たれか能く汝を醫さんや なんぢ

二七 の預言者は虚しき事と愚なることをなんぢに預言し かつて汝の不義をあらはしてその俘囚をまぬかれしめんと

二八 はせざりきその預言するところは惟むなしき重荷および追放たるゝ根本となるべき事のみ すべて往來の人

二九 なんぢにむかひて手を拍ち エルサレムの女にむかひて嘲りわらひ かつ頭をふりて言ふ 美麗の極全地の欣喜と

三〇 となへたりし邑は是なるかと なんぢのもろもろの敵はなんぢに對ひて口を開け あざけり笑ひて切齒をなす

三一 斯て言ふわれら之を呑つくしたり 是われらが望みたりし日なりわれら已に之にあへり 我らすでに之を見たりと

三二 エホバはその定めたまへることを成しいにしへより其命じたまひし言を果したまへり エホバはほろぼして

三三 憐れまず 敵をして汝にかちほこらしめ 汝の仇の角をたかくしたまへり かれらの心は主にむかひて呼はれり

シオンの女の墻垣よなんぢ夜も晝も河の如く涙をながせ みづから安んずることをせず 汝の腫子を休むること

なかれ 一九 なんぢ夜の初更に起いでて呼さけべ 主の御前に汝の心を水のごとく灌げ 街衢のほとりに饑たふるよ

二〇 なんぢの幼児の生命のために主にむかひて両手をあげよ エホバよ視たまへ 汝これを誰におこなひしか

願はくは顧みたまへ 婦人おのが實なるその懐き育てし孩兒を食ふべけんや 祭司預言者等主の聖所において殺さ

るべけんや 二一 をさなきも老たるも街衢にて地に臥し わが處女も若き男も刃にかゝりて斃れたりなんぢはその

震怒の日にこれを殺しこれを屠りて恤れみたまはざりき 三三 なんぢ節會の日のごとくわが懼るよとこの者を

四方より呼あつめたまへり エホバの震怒の日には遁れたる者なく又のこりたる者なかりき わが懐き育てし者は

みなわが敵のためにほろぼされたり

第三章

一 我はかれの震怒の答によりて艱難に遭たる人なり 二 かれは我をひきて黑暗をあゆませ光明にゆ

かしめたまはず 三 まことに屢々その手をむけて終日われを攻なやまし 四 わが肉と肌膚をおとろ

へしめわが骨を摧き 五 われにむかひて患苦と艱難を築きこれをもて我を圍み 六 われをして長久に死し者のご

とく暗き處に住しめ 七 我をかこみて出ること能はざらしめわが鎧索を重くしたまへり 八 我さけびて助をもと

めしとき彼わが祈禱をふせぎ 九 斫たる石をもてわが道を塞ぎわが途をまげたまへり 一〇 その我に對することは

伏て伺がふ熊のごとく潜みかくるよ獅子のごとし 二 われに路を離れしめ我をひきさきて獨くるしませ

を張りてわれを矢先の的となし 三 矢筒の矢をもてわが腰を射ぬきたまへり 四 われはわがすべての民のあざけ

イ哀二・八 水賽五・二〇 哀四 九 哀四・一〇 結 ル詩三一・二三 耶六 二二三耶五〇・一七 レ伯三〇・二〇 詩 ツ何六・一
ロ耶二四・一七 哀一 五・一〇 五二五、四六・五 三詩八八・五、六、一 二二三二二 一 二二三二二
ハ詩一九・一四七 二六 哀二・二二 へ哀三・二一 チ哀四・一三、一六 ヲ何九・一二、一三 四三・三 二伯一〇・一六 賽 一一二 詩三八・二二
ニ詩六二・八 二八・五三 耶一九 又哀三・四三 三二八・五三、一八 賽三八 何二・六 一四、一三・七、八 ラ耶二〇・七

伯三〇・九 詩六九 才耶九・一五 耶一〇・二六 九・七一 三九 *詩三三・九
 一・二一 哀三・六三 夕馬三・六 耶一三〇・六 賽 耶一五・一七 哀二 サ詩九四・一四 ミ伯二・一〇 賽四五 七詩八六・四
 ウ耶九・一五 ヤ賽三三・二 三〇・一八 米七七 一〇 一 來 七 歷三・六
 牛箴二〇・一七 マ詩一六・五、七三、 フ詩三七・七 一四二・一〇 シ箴一九・三
 ノ詩三一・二二 二六、一一九・五七 コ詩九四・二二、一一 ア賽五〇・六 太五、 一哈一・二三 エ米七・九

二五 となり終日うたひそしらる 一五 かれ我をして苦き物に飽しめ茵蔯を飲しめ 一六 小石をもてわが齒を推き灰をも
 二六 て我を蒙ひたまへり 一七 なんぢわが靈魂をして平和を遠くはなれしめたまへば我は福祉をわすれたり 一八 是にお
 二七 いて我みづから言り わが氣力うせゆきぬ エホバより何をも望むべきところ無しと 一九 ねがはくは我が艱難
 二八 と苦楚茵蔯と膽汁とを心に記たまへ 二〇 わがたましひは今なほ是らの事を想ひてわが衷に鬱ぐ 二一 われこの事を
 二九 心におもひ起せりこの故に望をいだくなり 二二 われらの尙ほるびざるはエホバの仁愛によりその憐憫の盡ざる
 三〇 に因る 二三 これは朝ごとに新なりなんぢの誠實はおほいなるかな 二四 わが靈魂は言ふエホバはわが分なりこの
 三一 ゆゑに我彼を待ち望まん 二五 エホバはおのれを待ち望む者とおのれを尋ねもとむる人に恩恵をほどこしたまふ
 三二 エホバの救拯をのぞみて靜にこれを待は善し 二七 ひと 人わかき時に軛を負は善し 二八 エホバこれを負せたまふ
 三三 ならば獨坐して黙すべし 二九 口を塵につけよあるひは望あらん 三〇 おのれを撃つ者に頬をむけ充足れるまでに
 三四 恥辱をうけよ 三一 そは主は永久に棄ることを爲たまはざるべければなり 三二 かれは患難を興へ給ふといへども
 三五 その慈悲おほいなければまた憐憫を加へたまふなり 三三 ひと 心より世の人をなやましかつ苦しめ給ふにはあらざるなり
 三六 世のもろもろの俘囚人を脚の下にふみにじり 三五 ひと 至高者の面の前にて人の理を枉げ 三六 ひと 人の詞訟を屈むる
 三七 ことは主のよろこび給はざるところなり 三七 ひと 主の命じ給ふにあらざれば誰か事を述んにその事即ち成んや 三八 禍
 三九 も福もともに至高者の口より出るにあらずや 三九 ひと 活る人なんぞ怨言べけんや 人おのれの罪の罰せらるゝをつぶ
 四〇 やくべけんや 四〇 ひと 我等みづからの行をしらべかつ省みてエホバに歸るべし 四一 ひと 我ら天にいます神にむかひ

て手とともに心をも擧べし 四二 われらは罪ををかし我らは叛きたりなんぢこれを赦したまはざりき 四三 なんぢ

震怒をもてみづから蔽ひ我らを追攻め殺してあはれます 四四 雲をもてみづから蔽ひ 祈禱をして通ぜざらしめ

もろもろの民の中にわれらを塵埃となしたまへり 四六 敵は皆われらにむかひて口を張れり 四七 恐懼と陷阱

また暴行と滅亡我らに來れり 四八 わが民の女の滅亡によりてわが眼には涙の河ながる 四九 わが目は斷ず涙をそよ

ぎて止す 五〇 天よりエホバの臨み見て顧みたまふ時にまで至らん 五一 わが邑の一切の女等の故によりてわが眼は

わが心をいたましむ 五二 故なくして我に敵する者ども鳥を追ごとくにいたく我をおひ 五三 わが生命を坑の中にほ

ろぼしわが上に石を投かけ 五四 また水わが頭の上に溢る 我みづから言ひ滅びうせぬと 五五 エホバよ われ深

き坑の底より汝の名を呼び 五六 なんぢ我が聲を聴たまへり わが哀歎と祈求に耳をおほひたまふなかれ わが

汝を顧たりし時なんぢは近よりたまひて恐るゝなかれと宣へり 五八 主よなんぢはわが靈魂の訴を助け伸べわが

生命を贖ひ給へり 五九 エホバよなんぢは我がかうむりたる不義を見たまへり 願はくは我に正しき審判を與へた

まへ 六〇 なんぢは彼らが我を怨みわれを害せんとはかるを凡て見たまへり 六一 エホバよなんぢは彼らが我を罵り

我を害せんとはかるを凡て聞たまへり 六二 かの立て我に逆らふ者等の言語およびその終日われを攻んとて運らす

謀計もまた汝これを聞たまへり 六三 ねがはくは彼らの起居をかながみたまへ 我はかれらに歌ひをしらる 六四 エ

ホバよなんぢは彼らが手に爲すところに循がひて報をなし 六五 かれらをして心くらしめたまはんなんぢの

呪詛かれらに歸せよ 六六 なんぢは震怒をもてかれらを追ひ エホバの天の下よりかれらをほろぼし絶たまはん

- イ但九・五
- 口哀二・二、一七、二二
- ハ哀三・八
- ニ野前四・二三
- ホ哀二・二六
- ヘ賽二四・一七 耶 一一
- 四八・四三
- ト賽五一・一九
- チ耶四・一九、九・一、又賽六三・一五
- 一四・一七 哀二・ 九詩三五・七、一九、
- 六九・四、一〇九、
- カ詩六九・二、一二四
- タ詩一三〇・一 拿二
- ソ雅四・八
- ツ詩三五・一 耶五一
- ラ耶一一・二九
- ム詩一三九・二
- ウ哀三・一四
- キ詩二八・四 耶一一
- コ二〇 提後四・一四
- リ詩七七・二 哀一・
- 三、一九・一六一
- 四、五
- ヲ耶三七・二六、三八
- ヨ詩三一・二二 賽
- レ詩三・四、六・八、
- 一八・六、六六・
- ネ詩七一・二三
- ナ詩九・四、三五・二三
- ニ〇 提後四・一四
- 一六
- 六、九、一〇
- 三、八、一〇、一一 哀
- 一九、一一六・一
- ナ詩九・四、三五・二三
- 二〇 提後四・一四

ノ詩八・三
オ申二五・一九耶
一〇・二一

七
マ伯三九・一四、一六
ケ詩二二・二五
フ哀二・二一、二二
コ伯二四・八
エ創一九・二五
テ哀五・一〇耳二・六
翁二・二〇
ア詩一〇・二・五
サ賽四九・一五
キ哀二・二〇
ユ申二八・五七
六・二九
×耶七・二〇
ミ申三二・二二
二一・一四
シ耶五・三一、六・
一三、一四、一四、
二三・二一、二一結
二二・二六、二八番
三・四
エ太二三・三一、三七
ヒ耶二・三四
モ民一九・一六
セ利一三・四五

第四章

一 あゝ黄金は光をうしなひ純金は色を變じ聖所の石はもろもろの街衢の口に投すてられたり
二 あゝ精金にも比ぶべきシオンの愛子等は陶器師の手の作なる土の器のごとくに見做る 山犬
三 さへも乳房をたれてその子に乳を哺す然るにわが民の女は残忍荒野の駝鳥のごとくなれり 乳哺兒の舌は渴
四 きて上脛にひたと貼き幼兒はパンをもとむるも孽てあたふる者なし 肥甘物をくらひ居りし者はおちぶれて
五 街衢にあり 紅の衣服にて育てられし者も今は塵堆を抱く 今我民の女のうくる愆の罰はソドムの罪の罰より
六 もおほいなりソドムは古昔人に手を加へらるゝことなくして瞬く間にほろぼされしなり わが民の中なる貴き
七 人は従前には雪よりも皎潔に乳よりも白く珊瑚よりも躰紅色にしてその形貌のうるはしきこと藍玉のごとくな
八 りしが いまはその面くろきが上に黒く街衢にあるとも人にしられずその皮は骨にひたと貼き乾きて枯木の
九 ごとくなれり 劍にて死者は饑て死者はもさいはひなりそは斯る者は田圃の産物の馨るによりて漸々
一〇 におとろへゆき刺れし者のごとくに成ばなり わが民の女のほろぶる時には情愛ふかき婦女等さへも手づから
一一 己の子等を煮て食となせり エホバその憤恨をことごとく洩し烈しき怒をそゝぎ給ひシオンに火をもや
一二 してその基礎までも焼しめ給へり 地の諸王も世のもろもろの民もすべてエルサレムの門に仇や敵の打いらん
一三 とは信ぜざりき 斯なりしはその預言者の罪によりその祭司の愆によれりかれらは即ち正しき者の血をその
一四 邑の中にながしたりき 今かれらは盲人のごとく街衢にさまよひ身は血にて汚れをれば人その衣服にふるゝ
一五 あたはず 人かれらにむかひて呼はり言ふ 去れよ穢らはし去れ去れ觸るなかれと彼らはしり去りて流離は

一六 異邦人の中間にても人々また言ふ 彼らは此に寓るべからずと 一六 エホバ怒れる面をもてこれを散し給へり再び

一七 これを顧みたまはじ 人々祭司の面をも尊ばず 長老をもあはれまさりき 一七 われらは頼まれぬ救援を望みて

一八 目つかれおとろふ 我らは俟むたりしが救拯をなすこと能はざる國人を待をりぬ 一八 敵われらの脚をうかどへば

一九 我らはおのれの衝衝をも歩くことあたはず 我らの終ちかづけり我らの日つきたり 即ち我らの終きたりぬ 一九 我

二〇 らを追ふものは天空ゆく鷲よりも迅し 山にて我らを追ひ野に伏てわれらを伺ふ 二〇 かの我らが鼻の氣息たる者

二一 エホバに膏そよがれたるものは陷阱にて執へられにき 是はわれらが異邦にありてもこの蔭に住んとおもひたり

二二 し者なり 二二 ウズの地に住むエドムの女よ悦び樂しめ 汝にもまたつひに杯めぐりゆかん なんぢも酔て裸

二三 になるべし 二三 シオンの女よなんぢが愆の罰はをはれり 重ねてなんぢを擧へゆきたまはじ エドムの女よなんぢ

の愆を罰したまはん 汝の罪を露はしたまはん

第五章

一 エホバよ我らにありし所の事をおもひたまへ 我らの恥辱をかへりみ觀たまへ 二 われらの産業は

三 外國人に歸し われらの家屋は他國人の有となれり 三 われらは孤子となりて父あらず われらの母

四 は寡婦にひとし 四 われらは金を出して自己の水を飲み おのれの薪を得るにも價をはらふ 五 われらを追ふ者

六 われらの頸に迫る 我らは疲れて休むことを得ず 食物を得て饑を凌がんとてエジプト人およびアツスリヤ人に

七 手を與へたり 七 われらの父は罪ををかして已に世にあらず 我らその罪を負ふなり 八 奴僕等われらを制するに

八 誰ありて我らを之が手よりすくひ出すものなし 九 荒野の刀兵の故によりて我ら死を冒して食物を得 一〇 饑饉の

イ哀五・一二 八王下二五・四、五 へ制二・七 哀二・九 二二 阿一〇 一五 五 五
口王下二四・七 二結七・二、三、六 慶 ト耶五二・九 結二二 又賽四〇・二 力詩七九・一 一五 五 五
二〇・五、三〇・六、 八・二二 一三、一九・四、八 ル詩一三七・七 ヨ申二八・四八 耶 ソ耶三一・二九 結 一八・二二
七 耶三七・七 結 申二八・四九 耶 申二八・四八 耶 申二八・四八 耶 申二八・四八 耶 申二八・四八 耶 申二八・四八
二九・一六 四・二三 耶 申二八・四九 耶 申二八・四九 耶 申二八・四九 耶 申二八・四九 耶 申二八・四九 耶 申二八・四九

ナ伯三〇・三〇 詩一 一四・二二 一六、二九、一〇、 一四五、二三 哈一 マ詩一三・一
一九・八三 哀四・八 ム賽四七・六 哀四・ 半伯一九・九 詩八九 オ詩六・七 哀二・二 九〇・二、一〇二・ 二二 一 一
ヲ賽一三・一六 亞 一六 一三九 三九 夕詩九・七、一〇・ 一二、二六、二七、 十詩四五・六 耶三一・一八

烈しき熱氣ねつきによりてわれらの皮膚はだへは爐かまどのごとく熱し 一 一 シオンにて婦女等おんなたちをかされユダの邑々まちにて處女等おとめがさ
 る 侯伯きうはくたる者ものも敵てきの手てにて吊つるされ老おいたる者ものの面かほも尊たふとばれず 少しき者ものは石磨いしうすを擔になはせられ童子わらわは薪たぎを
 負おふてよろめき 長老ちやうしやうは門もんにあつまることを止め少しき者ものはその音楽おんがくを廢はいせり 我われらが心の快樂たのしみはすでに罷やみ
 われらの跳舞そどりはかはりて悲哀かなしみとなり 我われらの冠冕かんむりは首かみより落おちたり 我われら罪つみををかしたれば禍わざはひなるかな
 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇
 これが爲ために我われらの心こころうれへこれらのために我われらが目めくらくなれり 一八 二一 シオンの山やまは荒あはて山やま犬いぬその上うへを歩ある
 なり 一九 エホバよなんぢは永とこしな遠はに在いますなんぢの御位みくらは世よ々々かぎりなし 何なにとて我われらを永ながく忘わすれわれらを
 斯かくひさしく棄すておきたまふや 二二 エホバよねがはくは我われらをして汝なんぢに歸かへらしめたまへ 我われら歸かへるべし我われらの日ひを
 新あらたにして昔日むかしの日ひのごとくならしめたまへ 三三 さりとも汝なんぢまつたく我われらを棄すてたまひしや痛いたくわれらを怒いりぬ
 たまふや

エレミヤの哀歌 をはり